

## 平成24年度 国語 (50分)

## 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は20ページである。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
  - ・①氏名欄  
氏名を記入すること。
  - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄  
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10
----

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

1

次の文章を読んで、後の問1～問4に答えよ。

「せっかくな(注1)の深川牡蠣(ふかがわかき)を」

押し殺した声が震えている。

間仕切りから様子をうかがっていた滯(みお)は、客の怒りの激しさを読み取って、丸い肩をぎゅつと竦(すく)めた。

「こんな酷(むじ)いことしやがって。食えたもんじゃねえ」

お代を投げつける音がヒビいて、男はランボウに引き戸を開けるとそのまま出て行った。今夜は、これで二人めだった。

店主の種市(たねいち)は、と見ると、「気にするな」とでも言いたげに滯(し)に白髪頭(しろがたま)を振ってみせる。滯(し)はしおしおと布巾(ふきん)を手に、長床几(ながしようぎ)に向かった。神田明(かんだみょう)神下御台所(かんだごだいどころ)町の蕎麦屋(そば)「つる家」。先の客が去った後には、七輪(ななりん)にかかったまままでほとんど手をつけられていない小ぶりの鍋(なべ)が残されている。

鍋肌(なべかわ)に塗りつけられた白味噌(しろみそ)がほどよく出汁(だし)の中に溶けだしたところへ、ふつくと太った牡蠣(かき)が顔を覗(のぞ)かせていた。これ以上火を入れると身が瘦(や)せてしまう。今が一番良い頃合(ころあ)いなのに、と娘は恨めしそうに客の出て行った引き戸を見た。

「酷(むじ)い」やて、そっちの方がよっぽど酷(むじ)いやないの——胸の内(むね)でそう毒づいた時だ。くつくくと忍び笑いが聞こえた。向かいの長床几(ながしようぎ)でなめ味噌(なめみそ)肴(さかな)にちびちび呑(の)んでいた浪人風(なみのりかぜ)の男が、箸(はし)を持った手で口もとを押さえ、肩を揺らして笑っている。齡(よわい)、三十前後。縞木綿(しまもめん)の袴(はかま)は全体に薄汚(うすご)れているが、月代(さかやき)や髻(ひげ)などは見苦しくない程度(ほど)にトット(ウ)っていた。確か、種市(たねいち)が「小松原(こまつばら)さま」と呼ぶ常連客(じょうれんきゃく)だった。

「いや、済(す)まん。考えていることがこうまでわかり易(やす)く顔(かほ)に出る者(もの)も珍しい、と思ったもので」

そう言って、まだ笑っている。

滯(し)は、少し顔を赤らめて、ぴよこんと頭を下(くだ)げると、床几(しど)の上(うへ)を片付け始めた。

丸顔(まるかほ)に、鈴(すず)を張(は)ったような双眸(まごころ)。(注5)ちよいと上(うへ)を向(む)いた小さな丸い鼻(はな)。下(した)がり気味(きみ)の両(りょう)の眉(まゆ)。どちらかと言えばキンパク感(かん)のない顔(かほ)で、ともに暮(く)らす芳(よし)からも「叱(しか)り甲斐(がい)のない子(こ)」と言(い)われている。それなのに料理(りょうり)が絡(か)むと、自分(みづか)でも抑(おさ)えようのない感情(かんじ)が生ま(う)まれて、それが顔(かほ)に出(で)てしまうのだ。

「こんな(こ)に旨(うま)いのに箸(はし)もつけずに、大(お)ばか野郎(やろう)——そう顔(かほ)に書(か)いてあるぜ。どれ」

言つて、小松原の箸が滯の持つ小鍋へと伸びる。白味噌と出汁の味が滲みてぶるぶるした牡蠣の身をひとつ摘まみ出すと、口へ放り込んだ。目を閉じ、うむうむ、と頷きながら咀嚼する姿は、どこか楽しげだ。口の中のものを飲み下すと、男はぱつと両眼を開けて滯を見、にやりと笑つた。

「面白い」

面白い、とはどういうことか。滯はシンボウ強く次の言葉を待つ。だが、小松原はそれ以上何も言わずに、錢を盆の上に置いて立ち上がった。滯は男を追い、慌てて店の表へ出た。

半分欠けた月が、思いがけず明るい。明神下を吹き抜ける初霜月の風が肌を刺した。

「お待ちくださいまし」

男が振り返つた。表情までは見えない。

「教えてください。何が……何が悪かつたのでしょうか？」

躊躇いながら切り出すと、あとは口をついて言葉が溢れた。

「私の作る料理は、どこが駄目なのでしょう？ この店に雇われて三月。今日、初めて料理を作らせて頂いたのに、あの有様です。旦那さんに申し訳のうて……。どないしたらええんか、わからんようになってしまつて」

くに訛りが出たことも気づかないほど、滯は夢中だった。欠伸を噛み殺した声で、男が答える。

「さあな。そいつは俺のあずかり知らぬことだ」

「けれど、面白い、と仰つていただきました。不味い、ではなく面白い、と」

はて、と男が首を捻る仕草をした。

A 「くには上方のようだな。俺にはよくわからんのだが、上方では奉公人が客を捕まえて、そうやって料理の教えを乞うのか？」

そのひと言が滯の胸を突いた。以前の奉公先、「天満一兆庵」は大坂でも名の知れた料理屋だった。奉公人がそんな真似をすれば、主人嘉兵衛は決して許さなかつただろう。滯にしても一兆庵でなら今のような振舞いは思いつきもしない。心の何処かで、つる家を軽んじていることを言い当てられた思いがした。

あい済みませんでした、と滯は消え入りそうな声で言つて、深々と頭を下げた。

中に戻ると、ちょうど種市が残つた深川牡蠣を殻ごと七輪で焼いているところだった。

「今夜はもう客は来ねえだろ。お滯坊、先に上がつて良いよ」

「旦那さん、その牡蠣」

「ああ、明日まで置いとけねえから、俺が食っちゃおうと思つてね」

牡蠣の口が開いたところへ、醤油と燗冷ましの酒を回し入れる。これまでそうした食べ方をしたことが無かつた溘だが、七輪の炭に零れ落ちた汁が芳ばしく香ると生唾が湧いて、思わずごくりと喉を鳴らした。

「ひとつ食つてみな。熱いから気をつけなよ」

焼けた殻で指先を火傷しそうになりながら、溘は、はふはふと牡蠣を頬張る。噛んだ途端、牡蠣の濃厚な旨みが弾けて、溘はうっとり目を細めた。常ならば苦手に感じる江戸の濃い醤油の味が、牡蠣の旨みを引き出すのに一役買っている。

「手は込んじゃいねえが、ちよいと旨いだろ？ 酒にも合う。小ぶりで味の濃い深川牡蠣はこうして食べるもの、と思ひ込んでる土地の者は多いのさ」

なるほど、と溘は思う。つる家に来る客の求めるのはこの味なのだ。殻焼きを思い描いて、出されたものが甘みの強い白味噌の土手鍋(注6)だったら、銭も投げつけたくなるかも知れない。両肩ががっくりと落ちた。

「白味噌の残りは、お藩坊が持つて帰つてかまわねえよ。お芳さんに汁でも作つてやんな」  
B 無理を言つて仕入れてもらった白味噌が、棚の隅に、肩身狭そうに置かれていた。

神田金沢町。小間物問屋や薬種商などが軒を連ねるその裏手に、溘の暮らすうちがある。

割り長屋の一番手前、奥行き二間半(約四・五メートル)の室内には、ふたつ重ねの行李(注8)に小さな仏壇が据えてあつた。その隅に薄い布団を敷き、二枚の夜着を重ねて、芳とくつついて眠る。掛け布団のない江戸の暮らしの中で身につけた、最も暖かく安心して眠れる方法だつた。

「ほうか、牡蠣をそないな風になあ」

芳が、か細い声で呟く。

「けど、牡蠣はやっぱり土手鍋が一番美味しいのと違うか。白味噌とよう合うし」

へえ、ご寮さん(注9)、と溘は冷たくなった鼻を夜着に押しつけながら嬉しそうに言った。

「私も、そう思います。鍋に塗りつけた白味噌が溶け出したんを、ふうふう言うて食べるのが、美味しいて、美味しいて」

天満一兆庵に女衆として奉公に上がったばかりの幼い日、泣いてばかりの溘を氣遣つて、当時はまだ大坂に居た若旦那の佐兵衛が、たびたび牡蠣

船に土手鍋を食べに連れて行ってくれたのだ。はるばる安芸(注10)の国からやって来る牡蠣船は、大坂の秋冬の風物詩でもあった。

「そう言うたら、佐兵衛はよう私の目え盗んで、あんたを牡蠣船に連れ出してたなあ」

芳がほのぼのと笑う。天満一兆庵の女将おかみだった頃のままでの口調で、滯は嬉しくもあり、切なくもあった。

もし、天満一兆庵が火事に遭わなければ、江戸店の主を任された佐兵衛を頼つてこの地に下ることもなかった。佐兵衛が行方知れずになどなっていなければ、江戸店が潰れることも嘉兵衛が落命することもなかった。幾多の不運のどれかひとつでも免れていれば、ご寮さんの芳が、奉公人に過ぎない自分と、こうして体をくつつけあつて眠ることもなかったのだ。

<sup>C</sup>「せやけど、つる家の旦那さんは、器の大きいおかたやなあ」

不意打ちのような芳の言葉に、闇の中で滯は意外そうに目を見張る。

「そうですねやろか？ 帰る道々、私、ずっと考えてました。土手鍋を作りたい、て最初に相談した時に、旦那さんは何で反対しはらへんかったんやろ、殻焼きのことを何で先に教えてくれはらへんかったんやろ、て。そしたらお客さんを怒らせることも、材料を無駄にすることもなかったのに」  
短い沈黙のあと、芳は滯の方へ寝返りを打った。

「嘉兵衛は、こない言うてた。『才のない者には、恥かかんよう盛大に手え貸したり。けど、才のある者には手え貸さんと、盛大に恥かかしたり』  
て。私の反対を押し切つて、女のあんたを板場(注11)へ入れて仕事を仕込んだ時、嘉兵衛は、どうやった？」

滯もまた、芳の方へ向き直る。

「へえ、厳しい仕込んで頂きました。賄まかないの味付けを仕損じた時も、何も教えて頂けんで、ずいぶんと恥ずかしい思いもしました」

「それみてみなはれ、ひとを育てよう、いう嘉兵衛の姿勢と、つる家の旦那さんの遣り様はよう似てはる」

そやろか、と胸の内で眩きながら、滯は瞳を閉じる。通り雨か、いきなり屋根を激しく叩く音に滯は布団の中でぎゅつと身を縮めた。雨は嫌いだつた。殊ことに激しい雨は。気配を察した芳が手を伸ばして夜着の肩口を押さえた。

(高田郁「狐のご祝儀」による。)

(注1) 深川牡蠣 —— 江戸深川沖で取れた牡蠣。

(注2) 長床几 —— 移動用の簡易腰掛け。

(注3) なめ味噌 —— おかずとして食される味噌。

(注4) 月代——男性の髪型の一つ。前額側から頭頂部にかけての頭髪を、半月形に剃り落とした髪型。また、その部分を指して呼ぶこともある。

(注5) 双眸——左右両方の瞳。

(注6) 土手鍋——鍋の内周に味噌を塗って作る鍋料理。

(注7) 割り長屋——住宅の一形態。

(注8) 行李——竹や柳で編んだ箱型の物入れ。

(注9) ご寮さん——関西以西の商家などで若い嫁または娘の尊称。

(注10) 安芸の国——現在の広島県西部。

(注11) 板場——料理屋で調理をするところ。

問1 傍線部(ア)～(オ)に当たる漢字を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は  ～  。

(ア) ヒビいて

⑤ ④ ③ ② ①  
吟 響 鐘 韻 叫

(イ) ランボウ

⑤ ④ ③ ② ①  
乱 卵 覧 濫 欄

(ウ) トトノって

⑤ ④ ③ ② ①  
弔 証 征 製 整

(エ) キンパク

⑤ ④ ③ ② ①  
斤 堅 謹 緊 禁

(オ) シンボウ

⑤ ④ ③ ② ①  
診 辛 針 清 審

問2 傍線部A そのひと言が滯の胸を突いた。とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6。

- ① 不味いではなく面白いというひと言によって、滯は失いかけていた料理人としての自信を取り戻すとともに自分の料理の欠点を改めて聞きたいという衝動に駆られたから。
- ② 上方では奉公人が客に料理の教えを乞うのかというひと言によって、滯は江戸のつる屋やその客を軽く見る気持ちを知らず知らずのうちに抱いていたと気づかされたから。
- ③ 上方では奉公人が客に料理の教えを乞うのかというひと言によって、滯は料理の腕を磨く努力をせず客のいいなりで料理を作るようになってしまったと気づいたから。
- ④ くには上方のようだなというひと言によって、滯は江戸の人々が上方の人間を快く思っていないと悟り上方の出身である自分の料理が江戸で好まれない理由が分かったから。
- ⑤ くには上方のようだなというひと言によって、かつて上方の有名店に勤めていた滯は料理の腕を磨かなくても客を満足させられるとうぬぼれていたことに気づかされたから。

問3 傍線部B 無理を言って仕入れてもらった白味噌が、棚の隅に、肩身狭そうに置かれていた。とあるが、この表現からどのようなことが読み

取れるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 食材を無駄にしても責められず、つる家の旦那さんから弟子として何も期待されていないと知った滯のさびしさ。
- ② 「無」や「白」という文字を使うことで、お客さんが離れるかもしれないと心配するつる家の旦那さんの焦り。
- ③ せっかく作った料理が結果的に失敗に終わってしまい、落胆すると同時に面目が立たないと感じる滯の気まずさ。
- ④ 店が小さすぎて売り上げも伸びず、余分な味噌を置いておく場所すらないというつる家の旦那さんのやるせなさ。
- ⑤ 「隅」や「狭」という文字を使うことで、本当は美味しい料理なのに客に分かってもらえないという滯の不満。

問4 傍線部C「せやけど、つる家の旦那さんは、器の大きいおかたやなあ」とあるが、このように芳が言ったのはなぜか。最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8

① つる家の旦那さんは料理が無駄になってしまっておそれがあるのに、濡の才能を伸ばすためあえて自分から教えるのではなく、気づかせ学ばせようとしていると感じたから。

② つる家の旦那さんは濡をいつもは厳しく指導してくれるが、失敗したときだけは優しく励ましてくれるなど、その場の状況に応じた適切な指導をしていると感じたから。

③ つる家の旦那さんは嘉兵衛に顔立ちが似ているだけでなく、濡に接する態度もそっくりで、以前の天満一兆庵でのやり取りを思い起こさせるような出来事が続いたから。

④ つる家の旦那さんは高級な深川牡蠣を無駄にしても怒らず、残った材料の効率的な活用法をさりげなく教え、料理だけでなく経営も学ばせようとしていると感じたから。

⑤ つる家の旦那さんはかつて商売敵であった天満一兆庵で働いていた濡を雇ってくれただけでなく、女将だった芳の面倒まで見てくれるなど、人情の厚い人だと思ったから。



次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

ぼくはフリー・ジャズが誕生し、絶頂<sup>(ア)</sup>を究め、死滅するまでを、砂かぶり<sup>(注1)</sup>で眺めていた世代に属します。オーネット・コールマンから始まって、アーチー・シエップ、アルバート・アイラー、セシル・テイラー……彼らの音楽をはじめて聞いたとき、言いたいことは分かるけれど、これは一回きりの表現みたいだなと思いました。

フリーというのは、ジャズの定型を壊したときにはすぐ一瞬のきらめきがありました。それはほんとうに衝撃的な経験でした。でも、それを延々とやるものではありません。たぶん聴いている方より先にやっている方が飽きてしまうのでしょうか。

フリー・ジャズのムーヴメントは、六〇年代の終わりにジョン・コルトレーンが死んだところで終わりを迎えました。一つのジャンルの生まれ方と死に方としては、あれほどみごとなもの音楽史にも例がないのではないのでしょうか。

それに比べると、パンクは、商業的なロックに対するアンチテーゼとして出てきましたが、基本的にはバンド編成はギターとドラムとベースにキーボードとヴォーカル。一応決まったコード進行があると、最低限の定型をキープしたからこそ、三〇年続いているのだと思います。

<sup>A</sup> 定型があるものの方が「飽きない」のです。

制限のない表現は、ある危うさを抱えています。

たとえば、ポール・ヴァレリーの有名な建築論に『エウパリノス』というものがあります。これは確か限定出版の豪華な建築写真集に添えられたエッセイだったと思います。版数も頁数<sup>(ベ)</sup>もあらかじめ決まっていて、何頁のここに何行と、字数と段落がすべて指定されていた上で執筆依頼されたヴァレリーはその制約の中で、彼の最高傑作の一つを書き上げました。

どういうわけかわかりませんが、「何でも好きなことを、好きなだけ書いていいよ」という無条件の場合よりも、制約を受けた方が創造意欲が湧くということは人間の場合にはあるのです。

漱石<sup>(ス)</sup>の小説は、ほとんどすべて連載小説でした。新聞連載ですから、毎回読み切りでオチがないといけません。そういう制約の中で、『虞美人草<sup>(グ)</sup>』『それから』『こゝろ』などの傑作が生まれたわけです。

形式は表現にとって「ネガティブな条件」です。<sup>(注5)</sup>

そして人間というのは、ほんとうに不思議なことですが、ネガティブな条件づけをされているときに、それをどう突破するか創意工夫をこらすことを通じて例外的な創造性を発揮するものなのです。

武道の形稽古の多くは、奇妙な身体運用を術者に要求します。日常生活では決してしないような怪しげな身体の使い方をしないと、その形をクリアできません。

なぜ、このような不自然な条件づけがあるのか、最初の頃、ぼくはよく分かりませんでした。しかし、長く稽古をしているうちにだんだんと分かってきました。

これは一種の「謎」なのです。

この形は「どうして、こんな形を遣わなければならないのか、その理由を自分で考えてごらん」という問いのかたちでぼくたちに投げ与えられています。

その問いに答えるためには、ぼくたちは「武道とはそもそも何のためのものなのか」という根源的な問いに繰り返し立ち返ることを求められます。その問いを繰り返し参照することなしには、暫定的な答えさえ出せないからです。

最初のうちは、形そのものができませんから、もともとの意味が失われて形骸化した、ただの無意味な身ぶりなんじゃないかなという疑念が湧いてきます。これが最初のハードルです。この段階で「降りてしまう」人間がいます。だから形なんか無意味だ、という安直な結論に飛びついて、形稽古を止めてしまうか、自分がやりやすいように形を変えてしまう人間がいます。

この最初のハードルを跳び越えることができるのは、「武道の形」には「何か今の自分程度の術技では理解が届かない深い意味があるに違いない」と思える人間だけです。

自分に分かること、自分にできることだけをやる人間と、自分に分からないこと、自分にできないことだからこそやりたいと思う人間を「スクリーニング」するこれが最初のハードルです。武道が求めているのは、そういう小さな自我の殻を破ることのできる人間です。

その次は、ある種の形がある種の身体部位の微妙な使い方を要求することに気づく段階です。

なるほど、これが「武術的身体運用」というものかと、はじめて「腑に落ちる」経験をするのがこのときです。こういう身体運用が自動的にできるようになればよいのだな、と納得がゆくのです。

でも形というものの奥深さは、おそらくそれにはとどまらないものだと思います。ぼくは今はまだその段階にとどまっていますけれど、「この先がある」ということについて確信が出てきました。うまく言えませんが、それはこの「形を棄てる」という段階が次に来るはずだ、ということです。

形という人間の身体の動きをわざと不自由にさせるようなネガティブな条件づけをするのは、そのような条件づけを「ぜんぜん気にしない」ような心身の状態を作り出すための教育的な布石ではないかと思うのです。

どの芸道でも「守破離」ということが言われます。

規範に従う段階、それを破る段階、そしてそれから離れる段階。

こういうことばの教育的な意味が最近になってようやく少しずつ分かってきました。

ぼくは今杖や剣をつかう身体運用の稽古もしているのですが、その形を遣っていてほんやりと思うのは、杖や剣を、あたかもそんなものを自分も相手も持っていないかのように身体をつかわせるために形があるのではないか、ということなのです。

中島敦の『名人伝』は古代中国の紀昌きしょうという弓の名人の逸話です。

世に並ぶ者なきといわれた弓の名人紀昌はさらなる境地を求めて甘蠅かんちよう老師という弓の名人(五)に就いて山中に籠こもり、多年の修行の後、弓も持たず、愚者のような顔つきになって長安の都に戻ってきます。しかし、首都の人々はついに戻ってきたこの弓の名人の噂うわさでわきたちます。盗賊は怖おそれて、彼の住む街区を迂回うがわし、空飛ぶ鳥でさえ、紀昌の家の上空は避けたほどです。

そして、紀昌はついに二度と弓を手取る(六)ことなく没しするのですが、晩年に、知人の家に招かれ、その家に置いてある、ある器具(七)に目を留め、「これは何というのですか？」と主人に訊きねました。主人は冗談だろうと思つて一度目は取り合いませんでしたが、紀昌が重ねて問うたので、彼がほんとうにそれが何であるかを忘れていたことを知った、という逸話が残されています。

この話のオチはもうお分かりでしょう。

紀昌は弓という道具もその用途も忘れていたのです。

この話は武術に限らず、芸術の本質をみごとに衝ついていると思えます。

あらゆる道具についての訓練は、それがあつたことを忘れさせるためにある。同じように、人間の身体についてのすべての修行は、人間が身体を持っていることを忘れさせるためにある。

これは別に哲学的な話ではありません。

ぼく自身が武道の稽古をしてきて、感覚として分かつたことです。まだ、どういうふうにすればその境地に達することができるのか、その道筋は分かりません。でも、「この方向だ」ということは確信できます。そして、この知見は武道のみならず、あらゆる人間の事象にかかわる真理に通じているとぼくは思うのです。

(内田樹『疲れすぎて眠れぬ夜のために』による。)

(注1) 砂かぶり——相撲すもうで、土俵のすぐ下の見物席。ここでは「間近で」程度の意味。

(注2) ムーヴメント——政治上・芸術上などの運動。

(注3) アンチテーゼ——ある事柄や主張に対して、それと対立・矛盾する事柄や主張。

(注4) コード——和音。

(注5) ネガティブ——否定的。

(注6) スクリーニング——ふるい分け。選別。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字の正しい読みを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は

9

～

13

(ア) 究究め

9

- ⑤ たか(め)
- ④ きわ(め)
- ③ みと(め)
- ② もと(め)
- ① みつ(め)

(イ) 暫暫定

10

- ⑤ ぜんじよう
- ④ かんじよう
- ③ ざんてい
- ② ぜんてい
- ① だんてい

(ウ) 布布石

11

- ⑤ すていし
- ④ ふせき
- ③ ふっこく
- ② じようせき
- ① ぬのいし

(エ) 就就いて

12

- ⑤ つ(いで)
- ④ ひびます(いで)
- ③ き(いて)
- ② そむ(いて)
- ① と(いて)

(オ) 没没する

13

- ⑤ えき(する)
- ④ やく(する)
- ③ し(する)
- ② たつ(する)
- ① ぼつ(する)

問2 傍線部A 定型があるものの方が「飽きない」のです。とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 14。

- ① 人間は定型があると、それを手本として作品を創作することができ、以降もそれに倣うことで優れた作品を作り続けることができるから。
- ② 人間は定型を創作の基本とすることで、かえってフリー・ジャズに代表されるような自由な表現を生み出すことができるから。
- ③ 人間は定型があることで、どんな時でも予想通りの結末を期待し、安心感や心地よさを得ることができから。
- ④ 人間は定型があると、それを突破しようという意欲によって、創造性にあふれた表現を生み出し続けることができるから。
- ⑤ 人間は定型に沿って作品を読むことによって、その作品のもつ面白さを理解し飽きることなく読むことができるから。

問3 傍線部B 小さな自我の殻を破ることのできる人間 とあるが、それはどのような人間か。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ

選べ。解答番号は 15。

- ① 自分に理解できないことは無意味であると考えのではなく、理解できないことでも、そこに深い意味の存在を信じて挑戦し続けることのできる人間。
- ② 自分に理解できないものに出会った時に、それを理解できるものへと置き換えることによって、目の前にある困難に柔軟に対応することのできる人間。
- ③ 自分の幸福の追求だけを考えるのではなく、世の中の全ての人々の幸福を考え、その実現のために私利私欲を捨てて真摯に努力することのできる人間。
- ④ 分らないことやできないことを自分一人で考えるのではなく、周囲の人間との間に壁を作らず誰とでもコミュニケーションをとることのできる人間。
- ⑤ 自分には理解できないことを認め、恥ずかしがらずにそれを他人に知らせることで、これまでの自分を乗り越えようと切磋琢磨することのできる人間。

問4 傍線部C ある器具に目を留め、「これは何というものですか？」と主人に訊ねました とあるが、これはどういうことを意味しているか。最も

適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 紀昌は修行して人間的に大きく成長し、謙遜<sup>けんそん</sup>して道具の名前も用途も知らないふりをしているということ。
- ② 紀昌が今まで手にしたことがない種類の弓であったので、恥を忍んで周囲に訊ねたということ。
- ③ 紀昌は長年修行に努めたことによって、弓の存在を忘れるほどの境地に達することができたということ。
- ④ 紀昌は弓の訓練のやりすぎで弓そのものに飽き、その存在を忘れるほど弓から遠ざかっていったということ。
- ⑤ 紀昌は甘蠅老師への反発から、愚かにも弓を忘れたと思うようになってしまったということ。

問5 この文章の表現の仕方や内容について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① これまで人々が否定してきた形式を使えば、人間の真理を簡単に探求できるということを、個人的な体験を具体例として用いることによって生き生きと述べている。
- ② 形についての従来の考え方を具体例を用いて否定することによって、現代社会においてこそ武道を学ぶべき意義があるということを、分かりやすく述べている。
- ③ 形をあえて無視することが芸術の本質であり、形にこだわらずに生きていくことが芸術家の道であることを、豊富な具体例から類推させることによって論理的に述べている。
- ④ 誰もが知っている文学作品を具体例として用いることによって、周囲の人間に理解されなくても一つの道に打ち込んで生きるべきであることを、共感を得るように述べている。
- ⑤ 形を守り、そして形を離れていくことが芸術の本質であり、人間の真理に通じることなのだとすることを、論の展開に沿って適切な具体例を配置することによって説得力を高めて述べている。

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。

平家との戦いで活躍した九郎判官（源義経）は、源頼朝に会うために鎌倉近くの腰越までやってきた。梶原景時は、主君の頼朝に義経のことを次のように語る。

「九郎判官殿こそ大臣殿父子を具足して、腰越に着かせ給ひて候ふなれ。君は如何御計らひ候ふ。判官殿は、内に野心を挟みたる御事にて候ふ。その故如何にと申すに、一の谷の合戦に、庄三郎高家、本三位中将生捕り奉りて、三河殿の御手に渡し参らせ候ひしを、判官大きに怒り給ひて、『三河殿は大方のまかたにてこそおはすれ、義経が手にこそ渡すべきものを、奇怪の者の振舞かな』とて、寄せて討たんと候ひしを、景時が計らひに、土肥次郎が手に渡してこそ、判官は静まり給ひ候ひしか。その上、『平家を討ち取りては、関より西をば義経にぞ賜ばんずらん。天に二つの日なし。地に二人の王なしと雖も、この後二人の將軍あらんずらん』と仰せしぞかし。

かくて武勇の達者、一度も慣れ給はぬ舟軍にも風波を恐れず、舟端を走り給ふ事、鳥のごとし。一の谷の合戦にも城は無双の城なり。平家十万余騎、味方は六万五千余騎なり。城は無勢にて、寄手は多勢にてこそ軍の勝負は決すべけれ。城は多勢、案内者、寄手は無勢、無案内の者共なり。たやすく落つべしとも見えざりしを、鴨越とて、鳥だにも翔り難き巖石を無勢にて落とし、平家を終に滅ぼし給ふ事は、凡夫の仕業ならず。

今度八島の軍に、大風浪おびただしくて船の通ふべき様もなかりしを、ただ五艘にて馳せわたし、僅かに五十余騎にて、憚る所なく八島の城に押し寄せて、平家数万騎を追ひ落とし、壇の浦の詰軍までも、終に弱げを見せ給はず、漢家本朝にもこの殿ほどの大將軍、いかでかあるべきとて、東国西国の兵も、万事一同に仰ぎ奉り、野心を挟みたる人にておはする間、人毎に情をかけ、末座の侍までも目をかけられ候ふ間、侍共、『あはれ侍の主や、この殿に命を奉らん事は、塵よりも惜しからじ』と申して、一同に心を懸け奉りて候ふ。

それに、左右なく鎌倉中へ入れ参らせさせ給はん事いぶせく候ふ。御一期の御程は君の御果報なれば、さりとも存じ候ふ。御子孫の世には如何候はんずらん。また、御一期とても何とか御座候はんずらん」

（『義経記』による。）

(注1) 大臣殿——平宗盛たいらのむねもり。源氏との戦で生け捕りにされた。

(注2) 具足して——引き連れて。

(注3) 君——源頼朝。

(注4) 庄三郎高家——武蔵国むさしのに本拠をもつ武士。

(注5) 本三位中将——平重衡たいらのしげひら。

(注6) 三河殿——三河守かみなもと源範頼。

(注7) 大方のまかたにて——通り一遍の凡庸なお方で。

(注8) 土肥次郎——頼朝拳兵以来の老臣。

(注9) 関より西をば義経にぞ賜ばんずらん——逢坂おうさかの関やましらの（山城国と近江国おうみのの国境にあった関所）から西は義経がもらいうけよう。

(注10) 鴨越——現在の神戸市の北から六甲山脈を越えて、一の谷の背後に通じる山路。

(注11) 八島——現在の香川県高松市屋島。

(注12) 漢家本朝——中国と日本。

(注13) 左右なく——たやすく。簡単に。

(注14) 御一期の御程は——頼朝が將軍でいる間は。

問1 傍線部A 判官大きに怒り給ひて とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18

① 庄三郎高家が生け捕りにした本三位中将重衡を、判官に渡さず、三河殿に渡したから。

② 庄三郎高家が生け捕りにした三河殿を、判官に渡さず、本三位中将重衡に渡したから。

③ 庄三郎高家が生け捕りにした本三位中将重衡を、三河殿に渡さず、判官に渡したから。

④ 本三位中将重衡が生け捕りにした庄三郎高家を、判官に渡さず、三河殿に渡したから。

⑤ 本三位中将重衡が生け捕りにした三河殿を、判官に渡さず、庄三郎高家に渡したから。



問2 傍線部B 二人の將軍あらんずらん の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 頼朝と義経の二人の將軍がいるべきではない。
- ② 頼朝と義経の二人の將軍がいることはできない。
- ③ 頼朝と義経の二人の將軍がいることになるであろう。
- ④ 景時と義経の二人の將軍がいてはいけない。
- ⑤ 景時と義経の二人の將軍がいたほうがよいはずだ。

問3 傍線部C たやすく落つべしとも見えざりし とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は 20。

- ① 味方は軍勢が多いうえに、地理には詳しくないので、即座に落ちのびる道が見つからなかったということ。
- ② 味方は軍勢が多く、地理にも詳しいので、容易に打ち負かされる気がしなかったということ。
- ③ 味方は軍勢が少なく、地理にも詳しくないので、落とすのに都合のよい石が見つからなかったということ。
- ④ 味方は軍勢が少なく、地理にも詳しくないので、簡単に落城するとは思えなかったということ。
- ⑤ 味方は軍勢が少ないが、地理には詳しいので、がけを降りる奇襲攻撃をすぐに思いついたということ。

問4 傍線部D いぶせく候ふ とあるが、そのように言った理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

21。

- ① 数々の合戦で功績を挙げ、武士たちからの信頼が厚い義経を、頼朝が切り捨ててしまおうとしているから。
- ② これまでの合戦での勝利は、義経の力によるものではないのに、その義経を必要以上に恐れる頼朝にあきれてしまったから。
- ③ 武芸に秀でて、頼朝からの信頼が厚い義経が鎌倉に入ると、景時がもらえるはずの褒美の土地が減ってしまうから。
- ④ これまでの合戦での勝利は、義経の力によるものではないのに、頼朝が義経と手を組みたいと思っているから。
- ⑤ 数々の合戦で功績を挙げ、武士たちからの信頼も厚い義経は、頼朝にとって危険な存在となるかもしれないから。

問5 本文の特徴について説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

22

- ① 義経のために死をもいとわないう景時の忠誠心を、漢語を多用することでリズムカルに語っている。
- ② 功罪両面の義経の話を挿入することで、義経への評価が揺れ動く様子を印象深く表したものになっている。
- ③ 義経に対する頼朝の気持ちを直接話法で語ることによって、頼朝の心情が生き生きと表現されている。
- ④ 合戦の場面における義経の類まれな能力の高さを、擬音語を多用することによって効果的に表している。
- ⑤ 義経の様子を具体的に説明することによって、景時の頼朝への申し立てが説得力のあるものになっている。

4

次の文章を読んで、後の問1～問5に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)

土<sup>ハ</sup>処<sup>レ</sup>下<sup>ヒクキニ</sup>争<sup>ハ</sup>高<sup>キ</sup>故<sup>ニ</sup>安<sup>クシテ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>危<sup>フカラ</sup>水<sup>ハ</sup>下<sup>キニ</sup>流<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>争<sup>ハ</sup>先<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>疾<sup>トクシテ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>遲<sup>カラ</sup>昔<sup>シゆんノ</sup>舜<sup>ニ</sup>耕<sup>スヤ</sup>  
 於<sup>レ</sup>歴<sup>レ</sup>山<sup>ニ</sup>碁<sup>ニ</sup>年<sup>ニシテ</sup>而<sup>レ</sup>田<sup>ツクル</sup>者<sup>ハ</sup>争<sup>ツテ</sup>処<sup>リ</sup>境<sup>カウ</sup>塽<sup>カクニ</sup>以<sup>ニ</sup>封<sup>ほう</sup>畔<sup>はん</sup>肥<sup>ひ</sup>饒<sup>ぜうヲ</sup>相<sup>ニ</sup>讓<sup>ル</sup>釣<sup>ルヤ</sup>於<sup>ニ</sup>河<sup>ニ</sup>浜<sup>ニ</sup>碁<sup>ニシテ</sup>年<sup>ニシテ</sup>  
 而<sup>スル</sup>漁<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>争<sup>ツテ</sup>処<sup>リ</sup>湍<sup>たん</sup>瀨<sup>らいニ</sup>以<sup>ニ</sup>曲<sup>きよく</sup>隈<sup>わい</sup>深<sup>しん</sup>潭<sup>たんヲ</sup>相<sup>ニ</sup>予<sup>あたフ</sup>当<sup>タリテ</sup>此<sup>コ</sup>之<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>口<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>設<sup>ケ</sup>言<sup>ヲ</sup>手<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>指<sup>シ</sup>麾<sup>きせ</sup>執<sup>トリテ</sup>玄<sup>ニシテ</sup>  
 德<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>化<sup>ハスルコトゴトシ</sup>馳<sup>ハスルコトゴトシ</sup>若<sup>シ</sup>神<sup>ノ</sup>使<sup>ハ</sup>舜<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>志<sup>ヲ</sup>雖<sup>ニ</sup>口<sup>ニ</sup>弁<sup>ジテ</sup>而<sup>レ</sup>戸<sup>ゴトニ</sup>説<sup>ク</sup>之<sup>コレヲ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ズ</sup>化<sup>スルコト</sup>一<sup>ヲ</sup>人<sup>ヲモ</sup>  
 是<sup>コト</sup>故<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>道<sup>トセ</sup>之<sup>ハ</sup>道<sup>ハ</sup>莽<sup>ぼう</sup>乎<sup>コトシテ</sup>大<sup>ナル</sup>哉<sup>かな</sup>

〔淮南子〕による。

- (注1) 舜——中国の伝説上の帝王。
- (注2) 歴山——地名。
- (注3) 碁年——一年。
- (注4) 塽塽——石の多いやせた土地。
- (注5) 封畔肥饒——地味の肥えて豊かな土地。
- (注6) 湍瀨——魚の少ない浅瀨。
- (注7) 曲隈深潭——河の曲がり角の深い淵。魚が多い。
- (注8) 指麾——手で指図すること。
- (注9) 玄徳——深遠な徳。
- (注10) 不道之道——言葉を用いない方法。
- (注11) 莽乎——広大なさま。

問1 傍線部A 疾 而 不 遲 の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 水の流れの速さは、地形の変化に応じて急になったり緩やかになったり自然と変わっていく。
- ② 水の流れはどんなに遅くても必ず下へ向かうので、目の前の流れの速さは気にしなくてよい。
- ③ 水は低いところに向かって流れ続ける限り滞ることはなく、流れの遅速も自然と決まっていくな。
- ④ 水は高いところから低いところへ自然と流れていくので、その流れは速くしかも滞ることがない。
- ⑤ 自然の力が水の流れる先を決めていくので、流れが速くても遅くてもたどりつく場所は変わらない。

問2 傍線部B 耕 と動作の主体が同じものはどれか。本文中に二重傍線を付した①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 争
- ② 譲
- ③ 釣
- ④ 処
- ⑤ 予

問3 傍線部C 化 馳 若 神 とは、どのようなことを述べているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 舜は神よりも手際よく、人々の心を押さえつけ支配していったということ。
- ② 舜は神のような不思議な力で、人々の生活を豊かにしていったということ。
- ③ 舜は神にもできないような方法で、自らの行動を変化させていったということ。
- ④ 舜は神に取って代わるために、自分の行動を人々に知らしめていったということ。
- ⑤ 舜は神が行うように速やかに、自らの行動で人々の行いを変えていったということ。

問4 傍線部D 使 舜 無 其 志 は、「舜をして其の志無からしむれば」と読むが、返り点のつけ方として最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 使<sub>三</sub> 舜 無<sub>三</sub> 其 志<sub>一</sub>
- ② 使<sub>レ</sub> 舜 無<sub>二</sub> 其 志<sub>一</sub>
- ③ 使<sub>二</sub> 舜 無<sub>二</sub> 其 志<sub>一</sub>
- ④ 使<sub>二</sub> 舜 無<sub>二</sub> 其 志<sub>一</sub>
- ⑤ 使<sub>レ</sub> 舜 無<sub>レ</sub> 其 志

問5 傍線部E 不 能 化 一 人 とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 為政者が自分の政治理念を言葉で人民に知らせなければ、どんなに行動で示したとしても人民は受け入れないから。
- ② 為政者が神を超越していることを人民に分からせなければ、どんなに優れた行動を見せても人民は納得しないから。
- ③ 為政者が自分の行動で心の中の高い徳を人民に示さなければ、口先だけでどんなに説明しても人民は従わないから。
- ④ 為政者が自分の行動の目的を人民に正しく説明できなければ、人民は為政者の指示に心から従うことはできないから。
- ⑤ 為政者が心に高い徳をもつことの価値を言葉で人民に教えなければ、人民は進んで自分の行動を正すことはできないから。

